家の前で生き倒れてるイケメンを拾った

篭原

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
家の前で生き倒れてるイケメンを拾った

【Ｎコード】
Ｎ５９３８Ｕ

【作者名】
篭原

【あらすじ】
家の前で行き倒れていた、完璧好みのタイプの血まみれズダボロイケメンを介抱したら、どういう訳か彼に敵と疑われた典子。
彼女はなぜ彼を助けたかを淀み無く語る。その理由は即ち、少女コズミック連載の「アラサー、イケメンを飼う」にあると。
ヒモを養う漫画に憧れる無職女性と、どこかの世界の巨乳フェチの恋愛話です。

梅雨のある日、深夜二時。就職祈願から帰ると、深い茶髪のイケメンが、ズタボロで玄関前に倒れていた。
私は迷わず彼を家に引き込んでいた。

＊＊＊＊＊

「誰だアンタ」

だから目覚めたイケメンがそう口にしても、なんら不思議は無い。
なにせ私たちは完璧に面識ナッシングな間柄だ。
「訳ありかと思って家であなたを介抱した者です。あ、服は脱がせたけどね。汚かったから」
下着まではさすがに手をつけていないが、何か不審げな目で見られた。
まあ当然か。
「病院近くにあるし、交番もすぐ側よ。その服は私のジャージ。あげるわ」
「だから、誰だアンタ」
「私は典子。今は無職。あなたは？　」
「俺は。……俺は」
「言いたくないなら聞かないよ。厄介事に巻き込まれたくないもん」
「……」
本当に、家の前に倒れる彼はズタボロだった。
家の前が血みどろだったからハイターで証拠隠滅するのに苦労したし、助けた彼の腕が半ばもげた状態から再生するのを見て、正直吐き気すらした。

「なぜ助けた」
「だから訳ありっぽかったから」
「おおよその地球人はそんな考え方はしない。敵か？」
折角助けてあげたのに、彼から吹き上がる何かおぞましい気配。
殺す気なのかな、と思って、それもいいか、と思った。
どうせ私は高卒だし、そんなに顔も良くないし、お父さんもお母さんも死んじゃったし、友達少ないし、携帯も持ってないし、一昨日には工場クビになったし、今日楽しみにしてた少女コズミックの漫画は完結したし。
正直、思い残すことないものなあ。
「好きな漫画と状況が似てたの」
いつの間にか私の首にハサミをつきつけているイケメンに言った。
「少女コズミックって雑誌知ってる？　私あんま好きじゃないんだけど、一個だけ好きな漫画があって。“アラサー、イケメンを飼う”って漫画なんだけどね。あ、私十九だからアラサーでは無いから。どんな漫画かっていうと、アラサー女子が家の前で男女構わずウリしてた癒し系イケメンを買って、そのまま家に連れてって保護して、着せる服が無いから男女兼用のジャージを仕方なくノーパンで着せるの。それでイケメンがアラサーの女物のパンツを履こうとしたもんだからアラサーは百均に行って、男に必要な髭剃りとか着替えとかパンツとかをどっさり買い込むわけ。これがダサいんだけど、イケメンが着ると余計ダサさが際立つの。でもイケメンは満面の笑みで「ありがとう」って感謝して、イケメンはアラサーのヒモになるの。なんだかんだで駄目人間同士でらぶえっちも無く単に主人とペットのまんま二十巻続くんだけど、なんと先月号でアラサーが会社をクビになりまして、もうイケメンを養えないって思ったアラサーは無理矢理イケメンの唇を奪って「口臭いのよ駄犬がー！！　」っつって家から追い出すの。で、今日は……もう昨日か。それの最終話の掲載日だったんだ。」
「そうか」

「そうなの。んで一昨日さ、私仕事クビになったの。タイミング良いよね。超漫画に共感しちゃって、でその矢先になんか――ほら、イケメンが家の前に倒れてるし」
「待ておい……イケメンって俺か？　」
「私の好みを凝縮したみたいなイケメンじゃない何言ってんのよ」
「……そうか」
「で、イケメンが家の前に倒れてるし、のたれ死ぬ前に眼福とかヒモを養う喜びを味わいたかったからつい拾いましたゴメンナサイ」
「速すぎてあまり聞き取れない」
「はあ？　私だって普段は一言二言しか喋らない人間よ。いいじゃない遺言くらいべ～らべら喋りまくったってさ！　で、よ。私アラサーじゃないけど低学歴だから次の職場も期待できないし、身内もいないから後は自殺か生活保護なわけ。――なので昨日完結編読めたからもう思い残すことないです。遺言終わり」
「そうなんでいいのか」
「くどい。ほら殺すんでしょ早くしてよ。あ、私処女だからレイプの後殺害とかは止めてよ。いっそ綺麗なまま死んで来世は天使に生まれるの希望なんだから」
「結末は？　」
「え」
「結末だ、漫画の」
　イケメンがハサミをテーブルに戻したので、私は腹の奥がムカムカした。
「なんでハサミ戻すの。人を殺そうと思ったならちゃんと初志貫徹しなさいよバカ」
「駄犬か」
「そうよ駄犬よ」
「ほら戻したから、結末だ」
「そこに漫画落ちてるから後で読めば良いじゃん」
「生きたまま目ん玉抉り出して爪はいで殺されたいのか」

「えっとねイケメンは実は単なるスケベで色狂いだからウリをしていただけで、実は超資産家の養子だったの。自殺しようとしてたアラサーを本能で察知してアラサーん家の窓を破って侵入して、持参金持って首吊り準備してたアラサーにスライディング土下座して、危うくアラサーが死にかけるの。で、アラサーが病院で目覚めると、名札が“紐田砂亜”になってて――あ、イケメンは紐田池男って名前でアラサーは安良砂亜って名前なのよ。つまり気絶してる間に籍を勝手に入れられてた訳ね。発狂するアラサーに「今度は僕があなたを助けたし、入院費は僕が払った。これからは僕が貴方を飼う番さ」って言って結婚式でハッピーエンドっつう糞ムカつく展開で」

「よくわからんが、まずお前を気絶させりゃいいのか」

「は？　」

と問いかけると同時に、側頭部をイケメンに殴打された私は、視界がブラックアウトしていた。

＊＊＊＊＊＊

目覚めたところは真っ白い場所だった。薄汚い家とはかけ離れた清潔感とアルコールと薬の匂い。

「病院……？　」

にしては、しきりのカーテンが豪奢過ぎる。

「起きたか」

声に反応して頭を傾けると、私の寝ているベッドに腰かけて、分厚い雑誌を読んでいるイケメンがいた。

イケメンが読んでいるのは月刊少女コズミック特大号で、表紙には「アラサー、イケメンを飼う」の番外編という見出しがあった。

私はどれだけ寝ていたんだ。というか生死の境をさ迷っていたんじゃ無いのか、もしかしなくても。

こちらを見ずに、イケメンは宣った。

「目覚めるのが遅すぎる。なぜあれごときで半月も目覚めない。訳

が分からん貧弱さだなお前」
「……。犯人あんたじゃん」
「手加減したが」
「……」
「名札を見ろ、さっさと」
「は？　起き上がれないんですけど」

こちらが吐きこそすれ、溜め息を吐かれる覚えは無い。
豪華な天蓋に似合わない不釣り合いに安価そうなベッドのパイプ。
イケメンは私の足元に行き、名札らしき紙を剥がした。
長い腕で病人である私に無言で突きつけてくる。その圧力に負け、渋々私はそれを起き上がって受け取った。
そこには、
「のりこ　ぐらいどう〝ぁいす　える　むーと　さかん　？」
と全て平仮名で書いてあって、それを見た私の顔自体がクエスチョンマークになるのは当たり前だろう。
「なにこれ」
「のりこと言うんだろう、お前は」
「あ、そういやそうね。ああ。名字が見当たらないけど」
「後半は俺の名字だ。これからのお前の名字でもある」
「ふー……ん？　」
気づけば、イケメンと私の顔が近い。
まるで丁度、入院直後のアラサーとイケメンのような角度だ。
「バッドスタート・グライドヴァイス・エル・ムート・サカン。俺のフルネームだ。覚えておけ」
「――ええと、それって」
「分かるだろ」
「勝手に私を籍を入れたの、アンタんところに」
「そういうことだ」

言うだけいったら、すんなりイケメン――いやバッドスタートか――はベッドから退いて、親切にも林檎をウサギに剥いてくれたりした。
「ん」
ちゃんと喋って渡せと思いつつ、私はどうもとウサギりんごを貰ってしまう。
「あのさ。結婚したわけよね」
「だからそう言ってるだろしつこいな」
「なんで」
「あの漫画通りに勝手に籍入れたら不味かったのか」
「やっぱあれが元か……。いやじゃなくて。言ったじゃん。清い身のまま死にたいんだって」
「俺は了承してない。結婚したからレイプでも無い。お前はもう自分の体をどうでもよく思っていた。従って結婚は問題ない。はい論破」
「いやだからさ。まあ別に結婚事態はまあ……」
「まあ？　」
「う……うれしい……よ。」
「……」
「中身を知らないけどまあ好みだし？　それだけだけどさッ」
「……」
イケメ……バッドスタートの沈黙が妙に気恥ずかしい。
「いや、だから、アンタがなんで私と結婚なんてしようとしたかが気になりまして」
「それなら簡単だ。イケメンと連呼されたからだ」
予想外の言葉に、私は呆気に取られる。
「誉められて悪い気はしないだろ。誰でも。俺みたいなゴツい野郎は俺の世界じゃモテないしな」
「あ、そう」
「だからイケメンと言い出した瞬間嫁にしようとは思ったんだが」

「へあ！？！　」
「話が長いしな」
「だだだってハサミ首に」
「ああああれか、……レイプしようとしていただけだ」
「はあああ！？！　」
「――いや、初見で乳自体が物凄くどストライクだったからレイプの口実作りしようとしただけだ。スマン。いやあ良い乳してるなお前。先に拒否されたからそれからは真剣に話を聞いてたし、まあ許せ」
「そういうことなら……ハッ」
　しまったうっかり誉め殺しで流されかけるところだった！　確かに誉められたら悪い気はしない。
「危うく拒否しなかったらレイプされてたんじゃない！　」
「殺す気は無かったからレイプしたとしてもどっちみち今頃はお前ここにいたぞ。お前が俺を助けていたらの話だが」
「あんたとんだ俗物ね。イケメンなのに」
「誉めてるのか。惚れるぞやめろ」
「惚れるのは良いけど誉めてはいないわよ。それよりさ、あんた、傷は？　」
「……ん、あの時のか。完治したし、部下が始末したから問題ない」
「あんた偉いんだ」
「偉いぞ。ちゃんと資産家だから安心しておけ」
　そう言って乳の下に手を滑り込ませてたゆんたゆんと揺らす男にどう安心しろと言うのか。
　顔か。
「のりこはやはり俺の理想の乳をしてるな。最高だ」
「乳だけかよ」
「顔も好みだぞ」
「複雑だわ」
「拒否してももう無理だな。――今度は僕があなたを助けたし、入

院費は僕が払った。これからは僕が貴方を飼う番さ。だろ？　」

だから、乳を揺らしながらじゃ説得力無いって。
そのセリフはこんなきったない使い方しないって。
そもそも私一瞬だってまともにアンタを飼えてないし。
そもそもアンタは何人だよ。ここどこだよ。
頭では色々と思うけど、所詮は低学歴の為せる技。自殺や他殺を覚悟してからの怒涛の展開に、最早頭が追いつかない。
ただでさえ、目の前には蕩けるような顔面の、完璧に私の好みの人間がいるんだ。そんな顔で言い寄られて、まともに思考できる人間なんて滅多にいないだろう。
まして、ふさげながら乳房を弄んでいた手が、優しく私の肩を抱き締めたりしながらこう訴えてきた日には。

「――だから、自殺も他殺もレイプもさせないから」
「うん」
「幸せにしてやるから、結婚を許せ」
「……。うん」

――だから、こんな気の効かない返ししか思い付かない私を許して、旦那様。

「不束者ですが、よろしくおねがいいたします」

――終わり――

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5938u/

家の前で生き倒れてるイケメンを拾った

2011年7月5日03時28分発行